

炭 焼 古 墳 群

筑紫郡那珂川町大字仲所在方形周溝墓の調査

福岡県文化財調査報告書

第 37 集

1 9 6 8

福岡県教育委員会

「炭 焼 古 墳 群」 正 誤 表

頁	行	誤	正
8	2	最 別	最 初
21	5	3・7・8 である。	3・5・8 である。
21	5	3・7 は	3・5 は
22	1	1・2・4・6 の	2・4・6・7 の
22	4	1・2 の	2・4 の
22	5	5・9 である。	1・9 である。

炭 焼 古 墳 群

筑紫郡那珂川町大字仲所在方形周溝墓の調査

序

この報告は、本年度福岡県教育委員会が実施した埋蔵文化財の調査のうち、重要と思われるものの一つに関するものであるが、わが国古代文化研究の一資料として活用いただければ幸甚である。

なお、本書の刊行にあたり、現地調査から本書の刊行まで、ご尽力いただいた調査主体の那珂川町教育委員会と亀井勇、永井昌文、高田一美の調査員各位、九州大学考古学研究室及び、ご指導、ご協力いただいた鏡山猛、岡崎敬、森貞次郎各福岡県文化財専門委員に深甚の謝意を表する。

昭和 43 年 3 月 31 日

福岡県教育委員会教育長

吉 久 勝 美

例 言

1. 本書は、昭和42年5～6月に那珂川町教育委員会主催、福岡県教育委員会協力によって、緊急調査した炭焼古墳群の調査報告書である。
2. 本書の執筆は、次のとおりである。

第1—1・2	柳田康雄
第1—3	亀井 勇
第2—1・2・3	柳田康雄
第2—4・5	宮小路 賀 宏
第2—6・7	柳田康雄
第3	柳田康雄
第4	永井昌文
3. 掲載の写真で、航空写真は、陸上自衛隊第4師団の撮影により、その外は、すべて柳田康雄が撮影したものである。なお、実測図の作成は、挿図目次に示すとおりである。
4. 本書の編集は、柳田康雄が担当した。

本文目次

第1 序	説	2
1.	はじめに	2
2.	調査の経過	3
3.	歴史、地理的環境	5
第2 古墳の構造と出土品		6
1.	第1号墳	6
2.	第2号墳	6
3.	第3号墳	11
4.	第4号墳	15
5.	第5号墳	17
6.	第6号墳	23
7.	その他の埋葬遺構	23
第3 後	論	27
1.	遺物について	27
2.	炭焼古墳群の性格と年代観	30
第4 炭焼第2号墳の人骨について		32

圖 版 目 次

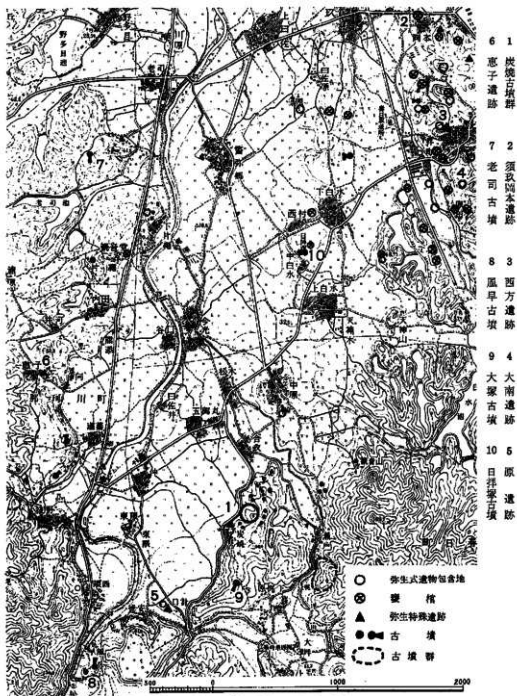
本文対照頁

図版 1	炭焼古墳群航空写真	5
2	(1) 古墳群遠望	5
	(2) 第2号墳全景	6
3	(1) 第2号墳主体部	8
	(2) 第2号墳第1号棺	8
4	(1) 第2号墳第1号棺	8
	(2) 第2号墳第2号棺	10
	(3) 第2号墳第3号棺	10
5	(1) 第3号墳全景	11
	(2) 第3号墳東側周溝	13
6	(1) 第3号墳主体部	13
	(2) 第3号墳主体部頭部	14
7	(1) 第4号墳全景	15
	(2) 第4号墳主体部	17
8	(1) 第4号墳主体部	17
	(2) 第5号墳全景	17
9	(1) 第5号墳東側周溝	19
	(2) 第5号墳周溝内土壌	20
10	(1) 第5号墳周溝内土器出土状態	20
	(2) 第5号墳石室蓋石	19
11	(1) 第5号墳石室	19
	(2) 第5号墳石室北壁	19
12	(1) 第5号墳石室東壁および南壁	19
	(2) 第2号墳第1号棺内人骨	32
13	(1) 第1号土壌(木棺墓)	23
	(2) 第2号土壌	25
14	第5号墳土師器・有孔円盤	28
15	(1) 第3号墳出土鉈	29
	(2) 第5号墳出土鉄鏃	29
	(3) 第5号墳出土刀子、鉄剣	29

挿 図 目 次

1. 炭焼古墳群付近遺跡分布図（国土地理院地形図 1 : 25,000、亀井・柳田作製）…	1
2. 炭焼古墳群地形図（九大考古学研究室測）……………	4
3. 第 2 号墳実測図（高田一弘・柳田・山崎茂孝・磯部昭憲測）……………	7
4. 第 2 号墳主体部実測図（宮小路・橋口達也測）……………	9
5. 第 3 号墳実測図（高田・柳田・山崎測）……………	12
6. 第 3 号墳主体部実測図（柳田測）……………	14
7. 第 4 号墳実測図（高田・柳田・山崎測）……………	16
8. 第 4 号墳主体部実測図（高田一美・宮小路・柳田測）……………	17
9. 第 5 号墳実測図（高田・柳田・山崎測）……………	18
10. 第 5 号墳主体部実測図（宮小路・橋口・柳田測）……………	20
11. 第 5 号墳周溝内土器出土状態（宮小路・和田加代子測）……………	21
12. 第 1 号土壌（木棺墓）実測図（柳田・肥山正秀・池辺元明・石橋正子測）……	24
13. 炭焼古墳群土器実測図（柳田測）……………	26
14. 福岡県東小田塚本遺跡土師器（柳田測）……………	27
15. 炭焼古墳群鉄器実測図（柳田測）……………	28
16. 第 3 号墳鉄斧復元図（柳田作製）……………	29
17. 有孔円盤実測図（柳田測）……………	31

なお、製図は全部柳田康雄が担当した。



第1図 炭焼古墳群付近遺跡分布図

「この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を複製したものである。(承認番号) 昭43 第8572号」

第 1 序 説

1. は じ め に

炭焼古墳群の発掘調査の端緒となったのは大成土地開発株式会社の宅地造成による。昭和42年4月21日ブルドーザーで破壊された石室内から地元民により鉄器が発見され、県教育庁社会教育課に持込まれた。そこでさっそく松岡史、柳田両技師が現地に赴き、鉄器が出土した石室を確認し、さらに4基の小さくて低い墳丘を発見した。このことを工事担当者に説明し、指示あるまで遺跡の部分の工事を中止するよう指導してこの日は引上げた。

次に4月24日来福されていた文化財保護委員会の岡田茂弘技官と鏡山猛福岡県文化財専門委員を渡辺正気文化財係長と松岡技師が現地に案内した。この時、さきに発見していた4基の古墳の上をブルドーザーが通り、そのうち1基は完全に消滅してしまっていた。また、別に箱式石棺が1基発見されたがこれも消滅状態であった。そこで急遽発掘調査の主体を那珂川町教育委員会とし、那珂川町文化財保護調査委員の亀井勇が調査主任となり、5月22日より調査を開始した。

調査員は次のとおり。

調 査 主 任	亀 井 勇
九州大学医学部	永 井 昌 文
福岡女子商業高校	高 田 一 美
福岡県教育委員会	宮小路 賀 宏
”	柳 田 康 雄

なお、炭焼古墳群の発掘調査には、公私多数のご協力をうけた。それは次のとおり。

九州大学考古学研究室

鏡山猛・岡崎敬・森貞次郎・小田富士雄・下条信行・佐田茂・亀井明德・橋口達也・塩谷勝利・上田和子・高倉洋彰・西田京子・清水直美

福岡大学歴史研究会

吉田俊之・平川久人・島津大道・田中伝・武藤正忠・佐藤芳夫・宮永孝・大島好則・山崎茂孝・石井保麿・竹本和夫・阿部哲郎・井手英二・井上潤一・立花敬子・石田金之

この外に陸上自衛隊福岡駐屯部隊の野田義寛一尉、山田稔、山口旭、鶴田博彦の各位、さらに大濠高校考古学部、福岡高校考古学部、九州女子高校考古学同好会の多数の生徒諸君が、補助員として参加し、援助いただいたことに厚く謝意を表わすものである。

2. 調査の経過

炭焼古墳群の発掘調査は5月22日から6月8日まで行なった。

5月22日 調査関係者が那珂川町教育委員会に集合し、調査打合せを行なう。現場では、古墳発見時より著しく変貌しているので遺構の確認順に番号を付けたが、報告書作成にあたり整理して、東より順に消滅古墳も含めて番号を付けなおした。したがって、以下使用する古墳の番号は整理後の番号である。

5月23日 あまりブルドーザーから破壊されなかった4号墳の調査から始めた。ボーリングにより、墳丘中央に石を確認したので、これを中心に調査を行ない、主体部の蓋石を発見し、さらに東側に断面V字形の周溝を確認する。さきに高田一英が調査した箱式石棺の東側にも周溝を確認する。これが2号墳である。

5月24日 4号墳のトレンチ断面図をとり、主体部の全容を出すと同時に、2号墳の石棺を再び掘出していたところ、2号墳には箱式石棺2、土槨墓1、合計3の主体があることがわかった。4号墳の周溝を追求したところ、これがいわゆる方形周溝墓であることがわかり、周溝のコーナー付近より土器片が出土し始めた。

5月25日 永井昌文福岡県文化財専門委員が2号墳の人骨を調査。

5月27日 2号墳の主体部の調査を続行し、周溝からは高坏片が出土する。2号墳の西側にあった溝は2号墳のものではなく、4号墳との間に1基古墳が存在することがわかった。

5月28日 2号墳の主体部調査を続行。3号墳の主体部らしき土槨を発見し、さらに北側の溝で土器片、鉄斧、底面に一部酸化鉄を発見。4号墳周溝と重複した古墳以前の土槨を発見する。文化財保護委員会の亀井正道技官来訪。

5月29日 宮小路は2号墳の主体部実測。4号墳周溝に重複していた土槨は木棺墓であることを確認。3号墳主体部も粘土、赤色顔料の出土状態から木棺が納められていたことを認める。

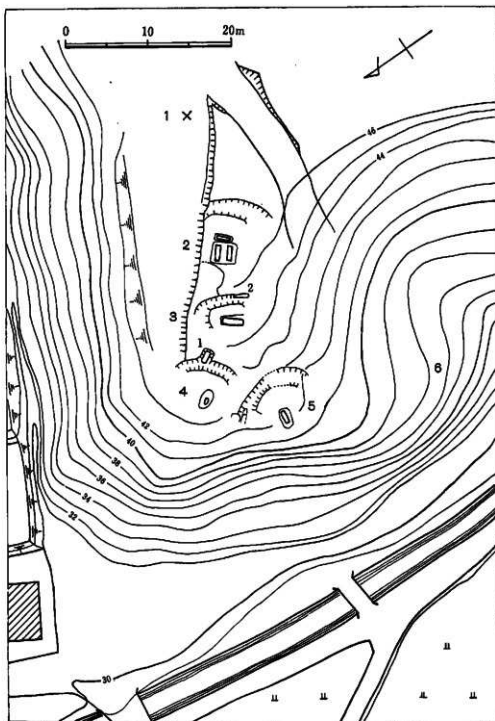
5月30日 最初の発見の鉄器が出土した5号墳の石室調査を始める。

5月31日 5号墳石室の調査を進めると同時に東側に幅2mのトレンチを設定したところ、断面U字形の周溝があることがわかった。岡崎敬、森貞次郎福岡県文化財専門委員の来訪があった。

6月1日 5号墳の周溝を追求したところ南側に土器群を発見。2、3、5号墳の写真撮影を完了し、平板測量を始める。

6月4日 5号墳周溝の調査を続行。周溝は方形とならず、円形になることがわかった。周溝内の土塊状の浅い凹地で赤色顔料と共に滑石製有孔円盤1個を発見する。宮小路は周溝内土器群の実測を完了し取上げる。

6月5日 有孔円盤の発見された凹みからさらに刀子1を発見する。平板測量は50分の1で続行



第2圖 夷陵古墳群地形圖

する。また本日より九州大学考古学研究室は全員で300分の1で地形測量を開始し、本日は遺構のある部分を終る。

●月7日 九州大学考古学研究室の地形測量終る。

●月8日 発掘調査終る。

3. 歴史、地理的環境

炭焼古墳群は、福岡県筑紫郡那珂川町大字仲字炭焼にあり、那珂川と御笠川が構成した筑紫平野の南西端の標高約47mの丘陵に位置している。那珂川町は、福岡市に南接し、これを貫流する那珂川の中流、上流地帯であって、炭焼古墳群の足下に広がる肥沃な水田地帯に点在する農家部落の先は福岡の都心部と博多湾を臨み、晴天時には志賀島、地島を鳥かんでみる。

炭焼古墳群の付近には弥生時代の遺跡が多い。炭焼古墳群の北北東約4kmのところに、多数の前漢鏡、銅剣、銅矛を出した弥生中期の有名な須玖岡本遺跡があり、これ以南には多くの甕棺墓地を含む弥生時代の遺跡が濃密に分布する。その中には、広形銅矛が出土した辻遺跡(9本)、熊野神社南裏遺跡(10本)①、西方遺跡(10本)②、および銅戈27本を出土した若葉台遺跡③があり、九州最初の銅鐸が発見された大南遺跡④もこの中に含まれる。この須玖岡本遺跡を中心とした地帯に比して、炭焼古墳群に近隣する弥生時代遺跡は少ないが、南西1kmには銅矛10本出土の原遺跡、北西約2kmの恵子遺跡では銅矛数本が出土している。

炭焼古墳群の付近には古墳が多いが、学術調査の行なわれたものが少ない。前方後円墳は、那珂川兩岸の丘陵上に並び、那珂川を中心とした平野の発展を知ることができる。古いものは那珂川左岸の老司の古墳、第1回南端の安德台上にある風早古墳、炭焼丘陵上の大塚古墳⑤があり、その間に後期的小前方後円墳が点在する。その外、後期の古墳群には浦の原、後野、瀬戸、合政古墳群があるが、炭焼丘陵の低墳丘古墳群は今回調査の炭焼古墳群の関連からも重要である。

註1 島田貞彦「筑前須玖先史時代遺跡の研究」(京都大報告11、昭5)

2 渡辺正気「筑紫郡春日町竹ヶ本遺跡調査報告」(福岡県報22、昭37)

渡辺正気・小田富士雄・松岡史「福岡県春日町新発見の銅矛」(九州考古学13、昭36)

3 昭和42年2月1日、宅地造成のブルドーザーにより、当初25本発見されたが、後で運搬された土中に2本含まれていた。昭和43年3月国保有となる。

4 鈴木基親・渡辺正気「福岡県筑紫郡春日町出土の銅鐸」(九州考古学10、昭35)

5 那珂川町には前方後円墳は1基も知られていなかったが、炭焼古墳群調査中に新たに4基を発見した。盗掘されたものが多い。

第 2 古墳の構造と出土品

1. 第 1 号 墳

昭和42年4月炭焼古墳群が発見され、松岡史技師と現地へ赴いた時確認した5基の古墳中最も大きく、東側の一番高い所であったものである。

墳丘は東西径約10m、高さ約1m程あったが、不幸にして業者のブルドーザーにより破壊消滅してしまった。今回の古墳発見前に削られてしまった東側の丘腹上にも方形周溝墓があった可能性もあるが、この第1号墳は立地から見ても炭焼古墳群、あるいはその支群の中核をなすものであったかもしれない。

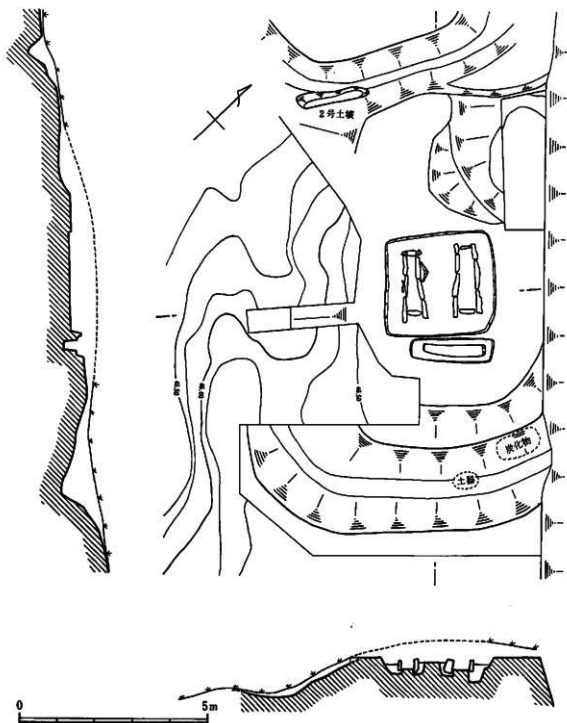
以上のようなわけで、この古墳の正確な規模は不明であるが、ブルドーザーの運転手および工事担当者の話によると、中心付近から石棺が出たそうで、方向は不明だが2基並んでいたらしく、内部一面真赤な色というから赤色顔料が塗布してあったものと思われる。目立った副葬品や人骨はなかったようである。

この古墳群が注目されたのは、方形の周溝であったが、第1号墳の場合方形周溝墓と考えられるので、削残しの部分の確認を行なったが、周溝らしきものは発見できなかった。

2. 第 2 号 墳

墳 丘

第2号墳は破壊された第1号墳を除くと丘陵背部東端の最も高い場所にあり、西に第3号墳が接する。最初の現地調査の時、確認した古墳中第1号墳の次に大きな墳丘をもっていたのである。墳丘といっても丘陵背部最高位にあった第1号墳は墳丘が明瞭であったが、これに比して第2号墳は、第3図が示すように第1号墳の墳丘裾からはほとんど高まりをみせずテラス状に伸びている。(図の点線部は破壊された部分を付近に残された地表から復元したものである)しかし、この古墳は丘尾切断状に溝を掘ることによって孤立した墳丘を形成している。一方南北両側は丘陵の急斜面となっているので、墳丘の状態はよくわかる。おしいことに北側はブルドーザーにより破壊されてしまった。しかし、南側を見ると地山を削って墳丘を造っているのがよくわかる。溝状のものを掘ることによって、墳丘を形造っているので一部周堤らしきものが存在する。ところが、これは周堤として土盛されたものではなく、墳丘構築によって丘陵の幅が狭かったために周堤らしく残ったものにすぎない。そこで溝の底から墳丘を計測すると、北東—南西の径約8m、北西—南東の径約11m、高さ1.5mの胴張り隅丸長方形のプランを呈している。



第3圖 第2号墳実測図 (縮尺 1/100)

周 溝

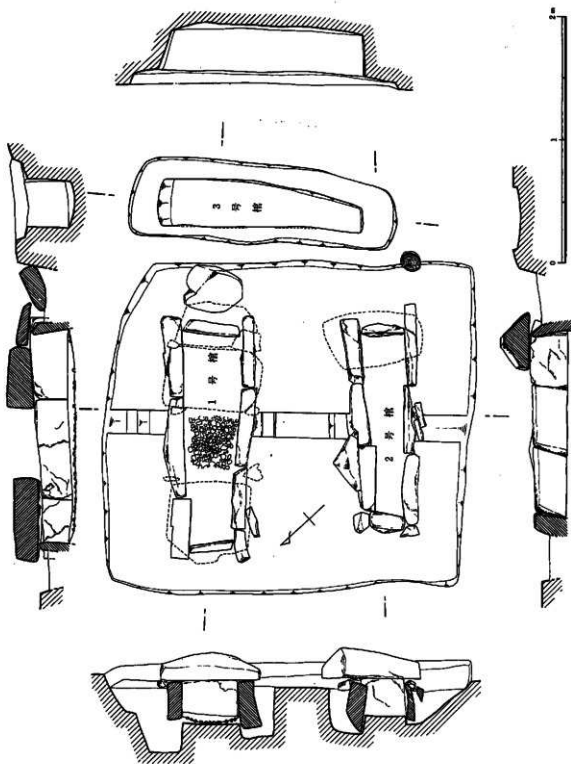
最別の踏査の際に、南側に周溝らしきものが残っていたのに気がつかなかった。さらに発掘時にはブルドーザーの土砂により埋っていたのでトレンチにより初めて確認したのである。東側溝は割合大きなものであるが、発掘前の状況では周溝と確認するまでにはいたらなかった。墳丘の調査は発見されている石棺を中心に行なったが、ブルドーザーに掘起こされたため、東側には黒色土が露出していたのでトレンチにより確認したところ、これが幅約2mの横断面V字形をしている溝であることがわかった。溝内に詰っている土は最下層に地山と同質の黄褐色土、その上に褐色土があるが、この層には木炭らしい炭化物を含んだところが多く、特に東側コーナーには焼土と炭化物ばかりの層が1.5m×1mの範囲に厚さ約30cm程堆積しているのを確認した。さらにその上層には黒色土の堆積が20cmから30cmある。この周溝の堆積状況を見ると、最下層の黄褐色土は腐植土が混入していないことから周溝を掘さくした時の地山の土が古墳構築後割合早く流入したことがわかる。東側周溝内に堆積した土は、2号墳の墳丘の土よりも1号墳の方から流入した土の方が多いが、これは2号墳の墳丘が低かったことを示すもので、さらに2号墳の墳丘の土は西側に流失することが多かったことは、古墳立地の地形的条件によるものである。丘尾切断状に掘られた東側の溝の横断面形はV字形をしているが、東側壁の方が急傾斜である。この点からも周溝としてよりも墳丘形成のための丘尾切断の色彩が強いのである。本墳の周溝は、以上のように方形はしているがいわゆる方形周溝でいわれているような「溝」と違ってきている。

主 体 部 (第4図)

本墳はブルドーザーの通路となっていたために、すでに一基の石棺が発見されていたので、墳丘が破壊されていたにもかかわらず早く古墳の位置をつかむことができた。しかしトレンチにより周溝が発見されてくると、すでに発見されている石棺の位置が墳丘の中心からずれていることがわかってきた。そこで第1号墳には石棺が二基発見されたということから、本墳にもその可能性が強くなったので、ボーリングを行なうと同時に墳丘中央部を精査した。その結果、北側にさらに蓋石の一部をブルドーザーに削られている箱式石棺一基、東側に土壌一基を確認したのである。そこで、ここでは北側の後に発見された大きい方の石棺を第1号棺、南側の石棺を第2号棺、東側の土壌を第3号棺として述べることにする。

第 1 号 棺

第1号棺は石材として花崗岩を利用した箱式石棺で、主軸の方位 S-48°-E に埋置されている。棺身は幅7cmから15cmの板石を北側壁に3枚、南側壁に4枚使用し、側壁に比べて薄い板石を小口として両側壁の間にそれぞれ1枚立てて内法長さ1.69m、南東側幅50cm、北西側幅36cm、深さ南東側35cm、北西側25cmの割合粗雑な組合せをしている。棺底には削平された地山に直角のとれた小石が全面に敷かれている。組み合わせられた石材の間には白味のある青色粘土がきわめて形式的に詰められている。棺は南東側が幅広く棺床は水平であるのに深くなっていると



第4图 第2号坑主体部分剖面图 (比例 1/30)

ころから、南東側が頭部と思われるが、後章で述べるように人骨は熟年男性1体分が集骨されているので意味も違ってくる。棺内には酸化鉄と思われる赤色顔料が棺床、4側壁全面に塗布され、蓋石も棺内だけ付着している。蓋石は大きなものが4枚平らな面を下にして被せているが、棺身の蓋石と接する上縁は割合平滑にととのえられているものの、石の接目等は若干間隙ができるので、青色粘土を詰めている。さらに被せた4枚の蓋石にも間隙うめのために小さな石が挟込まれ、その上から粘土で密封している。棺内には副葬品はなかった。

第 2 号 棺

第2号棺も花崗岩を使用した箱式石棺で、主軸の方位 $S-50^{\circ}-E$ に埋置している。棺身は幅10cmから15cmの板石を使用し、両側壁に各々3枚を並べ小口に各1枚を配して組み立て、さらに北西側小口は割合小さな石で角を補足し、両側壁も形式的に不整形な石で補足している。内法は長さ1.5m、南東側幅35cm、北西側幅22cm、深さ約35cmである。ブルトナーにより発見された時、調査した高田一美によると棺床には全面小石が敷かれていたというから、第1号棺と同様であったのであろう。粘土の使用も同じく蓋石の間隙にも詰めてあったという。赤色顔料の塗布も副葬品のないことも同じであるが、高田が石棺内より採集した人骨片は永井によると、成年女性と小児骨の二体分という。

第 3 号 棺

第3号棺は土壌で第1、第2号石棺の頭部の方、つまり南東側にある。土壌の構築がどの層位から掘込まれたかは、地山に達しないと確認できなかった。土壌は内に段をつけて掘り、蓋掛けとしたらしい。木蓋らしきものがあつたことは、土壌内に詰っている黄褐色土が非常に柔らかかつたことでもわかる。墓域は長さ2.18m、北東側幅65cm、南西側幅45cm、深さ約10cmに掘られ、その内の少し北西寄りに長さ1.68m、北東側幅40cm、南西側幅22cm、深さ35cm~40cmの土壌が主軸 $N-48^{\circ}-E$ の方向に掘込まれている。土壌の形状から幅広い北東側が頭部と思われるが、棺床はわずかにこの方が低くなっている。土壌壁は北東側小口のみ割合傾斜があるが他は垂直に掘られている。

この箱式石棺2基、土1基からなる第2号墳主体部は家族墓的色彩が濃厚である。そこで本墳で問題となるのは、各々の棺の関係である。まず2基の石棺は北東—南西の径2.9m、南東—北西の径2.7mの方形墓域内に主軸の方位2度違いで、ほぼ平行に配置されている点から人体埋葬は別として、石棺構築は2棺同時に行なわれたようである。この裏付けとして墳丘層位が問題となるのであるが、前にも述べたように破壊されていたので埋葬の前後関係は不明確である。2基の石棺は同時あるいは後葬を予定して一方を構築したことは、きまつた墳丘上に全面的に配置されていることから明らかであるが、土壌の方は別として2基の石棺には3体分の人骨が納められることは注意を要する。まず考えられることは、追葬されたために石棺内人骨が一方に集骨されたということである。この説をとると、第2号棺は女性が先に埋葬され、後に小児が追葬されたこ

とで説明がつく。しかし、第1号棺は男性人骨1体分であるのに集骨してあるのはどう説明すればよいか。成人骨でも保存がよくない点から、これも追葬された小児、あるいは乳幼児骨が完全に消滅したとも考えられる。さらにもう一つの仮説は、すでに白骨化した後に納棺したと考えることである。ここでどちらの説をとるかは、ブルトザーによる破壊、さらには第2号棺の記録不十分な点からどちらとも決めがたい。第3号棺の土壌は、2基の石棺と同時に埋葬されたものか追葬されたものかは決しがたいが、2基の石棺より先に埋葬されたものではないだろう。また土壌はその形状から、人体埋葬のためのものであろうが、その確証はない。

2基の石棺の構築、さらに埋葬方法を推定して見ると次のようになる。まず2基の石棺を並べるに十分な方形の墓坑を掘り、次に棺の位置を定めて予定された石棺の内法により棺床の深さと大きさを石材に合わせて溝を掘る。掘られた溝に石材の上縁をそろえて立て並べて石棺として組み合わされている。組み合わされた棺身は棺身上縁にあと約10cmのところまで埋戻されて人体埋葬の準備がなされたらしい。というのは、この面には棺内に赤色顔料を塗布したときのものであろうか石棺周囲のところどころに顔料が検出される。納棺の後蓋石を被せ粘土で密封して、石棺を埋め埋葬を終ったようである。

遺 物 (第13図)

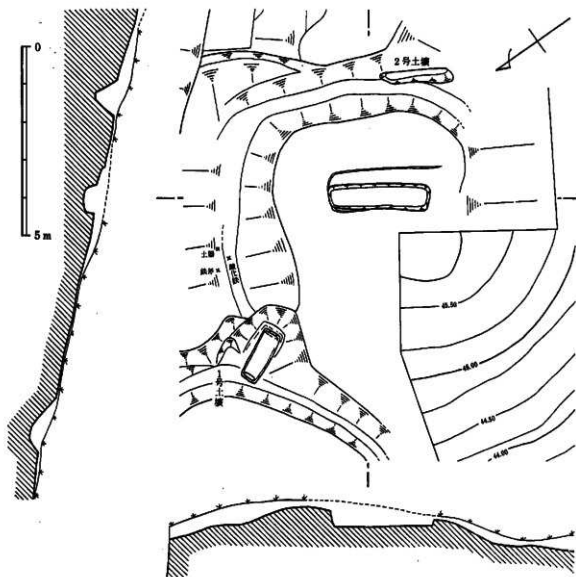
土 器 第2号墳主体部には副葬品が検出されなかったので、遺物といえるのは東側溝内で発見された高杯片と他の少量の土器片である。高杯片は溝底に散乱した状態で発見され、付近には木炭片も少量あった。この高杯は脚部が発見されなかったが、杯は割合厚手の盤状のもので、外面に樹目状整形痕を残している。脚のつけ根が太いところから、低くて大きく開く脚がついていたものと思われる。胎土に少量の砂を含む軟質の土器で細片となっていた。この高杯は口径12cmの小形のものである。

3. 第3号墳

墳 丘 (第5図)

第3号墳は丘陵背部にあり、第2号墳の西側に隣接している。第2号墳頂との比高は約1.5mで低位置にある、北西に第4号墳、西に第5号墳が接し北側、南側は丘陵の急斜面となっている。この古墳の墳丘上もブルトザーの通路となったために、墳丘の形状は不明確であるが、発見時の観察によるとわずかな墳丘のふくらみがあったことは確実である。しかし、これが方形であることは外見ではわからなかった。

ブルトザーの墳丘破壊により、初めの観察と違い、調査に際してこの古墳の位置がわかりにくかったが、第2号墳の西側の溝と思い調査していたものが、第3号墳の東側の溝とわかったのでこの溝を追求し墳丘の中心部を探した。この結果、本墳は溝の底で計測すると南北6.8m、東西約6mの隅丸長方形プランを呈する墳丘であった。墳丘の高さは断面図でもかるように東西



第 3 号 第 3 号 填 实 测 图 (縮尺 1/100)

断面では丘陵背部の縦断面になり、溝を考慮しないと墳丘は高さとしてあらわれない。しかし南北断面は地山を削って墳丘を形づけている。したがって墳丘は、盛土はほとんどなされておらず、現在では整形された地山の土はすぐ表土となっており、南北断面で示すように北側溝底からの墳丘の高さは、約70cmである。

周 溝

断面図に示すように、発掘前は周溝と認められるものはなかった。この炭焼古墳群の場合低墳丘であったが、古墳相互が隣接していたため下った墳丘線はすぐ隣の墳丘に移るため墳丘間の凹部をわかりやすいものにしていた。発掘の結果、東側に横断面V字形の溝があらわれ、方形周溝墓といえるものであることがわかった。ところが、この第3号墳も第2号墳と同様、丘陵背部を利用した丘尾切断状の墳丘整形である。すなわち、東側には溝があるが、西側には溝がないのは第2号墳と同じで、南北側も地山が多少は削られ整形はされているが溝とはなりえていない。東側に掘られた溝でこの古墳の構築時は、明確に他から独立した墳墓として墳丘を形成していたものであろう。この溝は東側にわずかな段が一部に見られるので溝幅をどこまでとするか問題があるかもしれないが、上端をとれば、幅1.4mとなる。深さは東側の縁から約80cm、西側縁から約50cmである。もちろん、溝の幅および深さは処々により多少は異なっている。溝は南北両側とも西側にまがるが、角張らずに隅丸の形をとる。しかし、北側も南側も丘尾切断状の東側の溝と違い、丘陵の自然傾斜のため、溝としてわずかにその痕跡を認めるだけで明確なものとなっていない。西側は溝の痕跡も認められない。

東側溝内の土の堆積状態を見ると、溝の下半分は地山と同じ黄褐色の花崗岩ばいりん土壌が詰っており、溝が掘られて、割合早い時期に流れ込んだようである。その上に腐植土を含む褐色土が10cm程堆積し、さらに上には黄褐色土を一部混えて黒色の腐植土が地表まで詰っている。この堆積状況は南北両側とも観察できた。

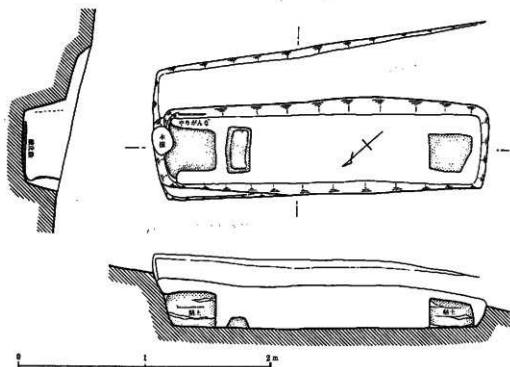
北側の周溝らしいところからは土器片、鉄斧、赤色顔料が発見されている。土器片と鉄斧は黒色土の下半部に含まれていたが、赤色顔料は溝底に密着して検出された。

主 体 部 (第6図・図版6)

主体部は墳丘のほぼ中央にあり、主軸の方位も墳丘と同じくN-42°-Eに設置された土壇である。しかし、この第3号墳の主体部は図のように段がついているが、各々の段の主軸は方向が違っており、深い方は前記のとおりであるが、浅い方はN-35°-Eとなっている。したがって、浅い方は深い方の土壇に付設した設落ではなく、本来別のものであるように思われる。浅い土壇状のものが別ものとして、両者の新旧関係は盛土がほとんどなくブルドーザーにより削平されているので不明であるが、造られた意図は別として、本古墳に関係あることは間違いないことで、二次的埋葬の可能性もある。

ここでは、深い方の土壇を第3号墳の主体部として述べることにする。土壇の底面は墳丘面下

60cmにあるが、ブルドーザーの墳丘破壊により、地山に掘り込まれた部分のみを観察することができないので、墳丘のどのあたりから掘り込まれ、構築されているかわからない。土壌は長さ2.55m、幅65cmの隅丸長方形プランを呈し、中に詰った土は横断面から見ると、底面に厚さ4cmに酸化鉄を多く含む木目細かい砂質の土があり、西側の端には、幅1cmの細い酸化鉄の線が縦に走っており、この線を境として外側には地山埋戻しの黄褐色土が詰まり、内側には黒味を帯たさつた土が割合やわらかく詰っている。しかし、東側は酸化鉄の線は不明瞭である。このことから土壌内には木棺が納められたことが明らかであるが、さらに土壌内両端より粘土が出土し、この粘土が土壌内に納められた木棺を固定するためのものであることから、その木棺が組合式のものであることがわかる。粘土は木棺の両側板の内側、小口板外側にぎっしりと詰められている。北側端の粘土は幅33cm、長さ40cm、厚さ27cmの方形となっており、上面はゆるやかな曲面をもって整形されている。また南端にも幅30cm、長さ35cm、厚さ25cmの粘土がある。この粘土の配置から推定される組合式木棺の内側の北端には土壌底部に幅20cm、長さ35cm、高さ10cmの台形状の粘土塊があり、これは位置と形状から粘土枕と思われる。この枕と思われる粘土には多くの酸化鉄が付着している。これらの粘土は全部青色粘土で、粘土自体には割合不純物を含まない。粘土の配置から木棺の寸法を推定すると、北側小口外側の粘土と枕から、小口板の



第 3 図 第 3 号墳主体部実測図 (縮尺 1/30)

厚さは10cm以上になることはなく、5cm～8cm程であることがわかる。両側板も同程度の厚さであることは頭部小口外の粘土の状態からもわかる。両側板の長さは2.3mから2.4mで、小口板の長さ、つまり木棺の内径は、枕あるいは小口外の粘土から約35cmということになる。この方法でいくと、木棺内径の長さは約1.55mということになり、かなり小形のものである。これらの現状からは、棺底の木板の有無は不明であるが、棺内の土の詰まり具合から蓋はあったようである。木棺の深さは小口粘土から25cm以上と推定される。

副葬品は木棺外の頭部東端から鉋が発見された。鉋は土壌底から15cmのところにあることから、小口から外に出た側板の上に置かれていたものようである。

遺物 (第13・15図、図版14・15—1)

主体部の鉋は上記のとおりであるが、その他に北側の溝と思われるところから、鉄斧1個と土器片が出土し、その付近の溝底から少量の酸化鉄が検出された。鉄斧と少量の土器片は溝に堆積した最下層の黄褐色土と上層の黒褐色土との接線から発見されている。

土器 (第13図) 土器は北側周溝の黒色土と最下層の黄褐色土の接線付近に径約1mの範囲に破片となって発見された。土器片は同一個体のもので、別なものを1片も含まない。器形は壺で、くびれた頸部は割合垂直で複合状口縁のつく形態であるが、この複合する口縁が大きく開くところと、肩部に大きく刺突した張付凸帯が一条めぐるところに特徴がある。胴部は肩の張った球形となるようで、底部はとがり気味の丸底であるらしい。

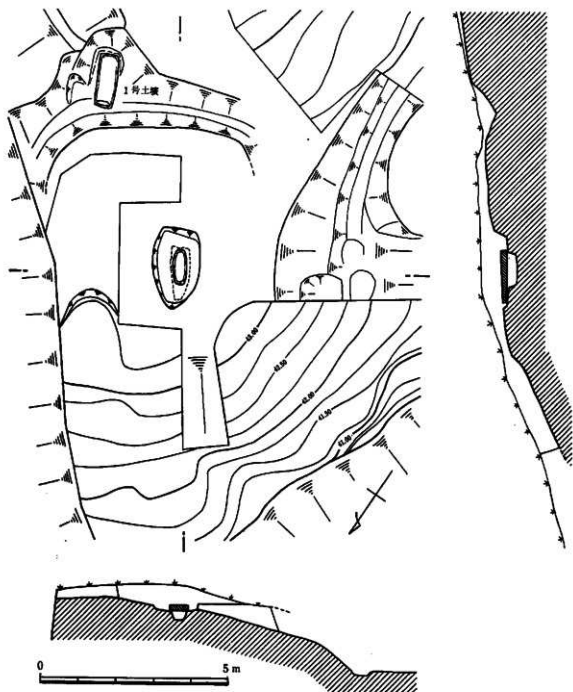
鉋 (第15図、図版15—1) 現状では刃の部分から90度以上に曲っている。この状態では鉋として使用不可能であるから、本来は少し彎曲していたと思われるが、埋葬当時、あるいはそれ以前に曲げられたのであろう。全長は22.2cm、切先幅1.1cm、茎尻幅0.7cm、厚さ0.2cmあり、切先は第15図では下面に線があり、横断面は「く」の字状に屈曲している。刃の部分は茎より幅広く、丸味のあるスプーン状を呈している。

鉄斧 (第16図) この鉄斧は鋳造品であったが、調査後の整理不十分なためか、亀裂が生じ、復元不可能までに粉砕してしまった。したがって第16図は出土当時のスケッチから復元したものであるが、長さ10.7cm、刃先幅48cmは確実な寸法である。

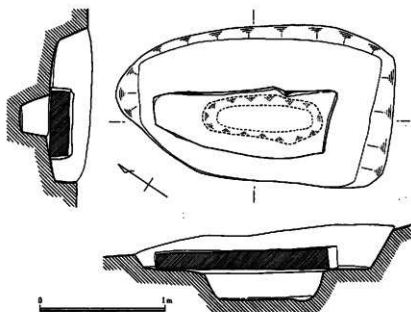
4. 第4号墳

墳丘 (第7図)

第4号墳は、丘陵の突端にある。3号墳の西、5号墳の東北方に位置する。尾根に添って左右をブルトーンに削平されたため墳丘の全体は不明であるが、主体部を中心に破壊されなかった尾根の上下により、ほぼ大きさを推定することができる。東南—北西約5米。若干盛土されたと考えられるが、上面は平坦である。また、主体部の下方(尾根下方)の地山は削られ、墳丘をきわだたせるための配直がはらわれている。主体部は、墳丘のやや北西によっている。



第7圖 第4号墳実測圖 (縮尺 1/100)



第 8 図 第 4 号 墳 主 体 部 (縮尺 1/30)

周 溝

周溝は、主体部の尾根上方にある。左右がブルドーザーにより削られたために遺憾ながら全体を知り得ない。残存している溝は、幅約 半、深さ約 米の兩丸方形的なプランである。

主体部より下方には溝の発見はなく、恐らく主体部上方の尾根を半月状に切るような溝かと考えられる。またこの溝は、第 3 号墳を切断している。

主 体 部 (第 8 図)

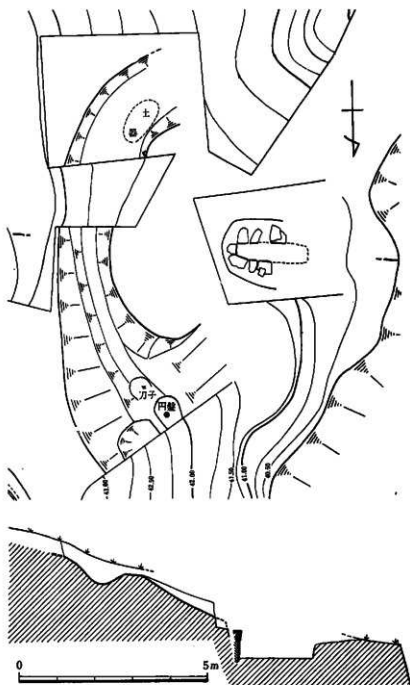
石蓋土壇である。まず地山を深さ約 30cm、長さ 2.20m、頭部幅 1.10m、下方がすばまる舟型のプランに掘り下げ、さらに中心部に土壇を掘る。土壇は深さ約 23cm、上縁は長さ 96cm、幅 34cm、底は長さ 76cm、幅 21cm の舟型に掘られ、厚さ 17~12cm、長さ 1.40m、幅約 50cm のやはり舟型の蓋石が被せられる。土壇の頭部に径 17cm の円形に丸く若干の窪みが認められる。蓋石の主軸は S-43°-W である。人骨の残存はなかった。

5. 第 5 号 墳

墳 丘 (第 9 図・図版 8-2)

尾根の西斜面に築造された、周溝を持つ円墳である。墳丘はブルドーザーにより削平され、石室までも破かいされていた。最初、県教育委員会に遺跡発見の通報があった際に、石室の石材等が運びこまれたが、それはこの古墳のものであった。

墳丘は削平され、古米の大きさを知るのに全く不便であるが、第 9 図における等高線の変化、



第 5 号 第 5 号 填 实 测 图 (缩尺 1/100)

あるいは周溝の径によりある程度推定することができる。南及び北の残存地表面における等高線が大きく山側に侵入している部分があるが、これは周溝位置におけるための変化である。このことにより、この侵入に対して主体部方向における等高線の後退は、封土を意味するのであるが、残念ながら中心部が削平されたため封土の高さを知ることはできない。しかしながら、主体部を通ず断面等と考え合せると、2m程度の盛土があったのではないかと考えられる。

この円墳の径は、下半が削平されたため不明である（他の古墳同様、半月状の周溝で、下半には溝はないと考えられる）が、周溝底から計測すると20mと考えられる。しかし、周溝は正円を示さず、やや隅丸方形の形状であるので、正確な意味では円墳とはいえない。

周 溝

溝は、幅3～4mである。深さは第9図断面個所において外側溝縁から約1.5mである。なお、溝底は石室蓋石より約2.3m高い。断面個所においてはU字形を示しているが、土器出土個所においては皿状である。また、円盤出土個所外側溝壁には、幅2.3mの方形の土壁状のものがあるが、溝掘削以前の遺構でその性格は不明である。なおこの個所の内壁は急に主体部に向けて弯曲するが、ブルドーザーにより削平攪乱を受け、性格の究明はできなかった。しかし、地山は上記のとおり弯曲する。溝は石室を中心に西側下半で自然消滅するらしく、ブルドーザによる掘削断面には出現しない。周溝として説明してきたが、半月状の溝であり正確には周溝とはいえない。

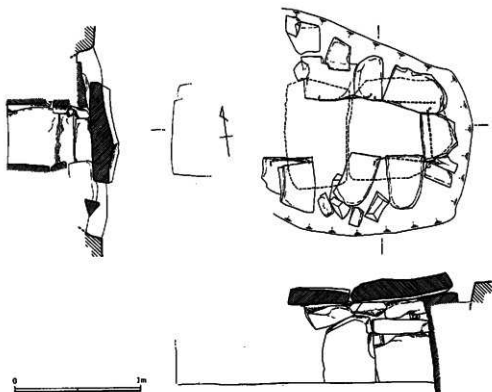
石 室（第10図・図版10—2・11・12—1）

竪穴式石室である。西半がブルドーザにより破かいされている。石室は幅約1.5m、長さ約2.5mほどの長方形の墳内に架構されている。石室の内法は、東方幅48cm。他方の幅及び長さは破かいされているためにわからないが、石材が立てられていたときの形が残っているため大方の推定ができる。幅約50cm、長さ約1.9m位の大きさと考えられ、長軸は北北東（N 6° W）に傾いている。床面（標高約40.05m）が天井石までの高さは約95cmである。

石室の石材は全て花崗岩を用いている。約40cm×50cmの扁平な石材を腰石として立て、その上にそれより小さく扁平な石材を1～2段に小口積みにして、さらに蓋石を被せている。蓋石は2枚が残存しているが、石室の大きさからさらに1～2枚はあったものと考えられる。また、石室と蓋石、蓋石と蓋石の接合面には黄色粘土が詰められている。側壁は極めて若干内傾している。石室内面には赤色顔料が塗られている。床面には赤色顔料が敷かれている以外、敷石や礫石敷きはなかった。遺物は、北壁に添って鉄剣1口、東壁近くに鉄鏃15本が出土したといい、刀子出土個所は正確にはわからない。石室の構造は、所謂、竪穴式石室と箱式石棺の形式を折中したともいふべき形態である。

溝内遺物出土状態

溝内からは、高杯9個体、刀子1本、有孔円盤1個が出土した。



第10図 第5号墳主体部（縮尺 1/30）

高杯出土状態（第11図・図版10-1）

9個体の高杯は、主体部から東南約10mの地点で発見された。それぞれ3グループに小さくわかれられる（A・B・C群）。全て転倒し逆になっているが、順序よく並んだ状態である。若干溝底から浮いているため、古墳構築後ある程度時間が過ぎて転入したことがわかる。埋葬時に使用したものが、しばらくして転入したものであろうか。A群の高杯は高杯部分計測表の2・3・4、B群は5・6、C群は1・7・8・9である。

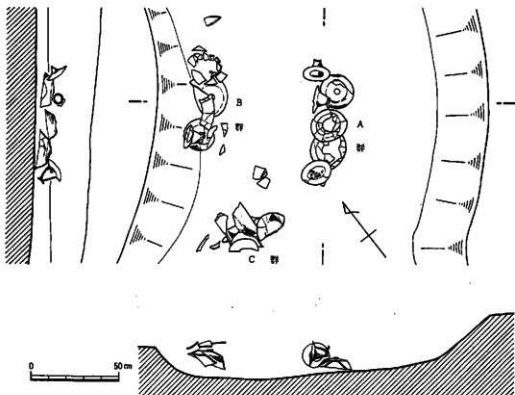
刀子及び有孔円盤出土状態（図版9-2）

共に主体部から北東約10mはなれて溝底より発見された。

刀子は、有孔円盤出土地より東に約2mはなれて、径約1mの半円形の窪みの底面から、有孔円盤も同様に幅約1mの隅丸長方形の窪みの底面から発見された。窪みには赤色顔料が認められ、刀子及び有孔円盤が丁重に奉安されたことがわかる。

遺物

出土遺物は、石室内では鉄鍔15本、鉄剣1口、刀子1本。周溝からは、刀子1本、滑石製有孔円盤1個、土師高杯9個体分が出土した。



第 11 図 第 5 号墳周溝内土師器出土状況

土 器 (第 13 図・図版 14)

土師製高杯 9 個体分が出土した。遺物中特に注目を集めたものである。高杯は、(A)脚に透孔を持つもの、(B)透孔のないもの (C)透孔なくさらに柱状部にふくらみがなく全体に細形であるもの、の 3 様に分けられる。

A この種に当るのは 3・7・8 である。3・7 は柱状部に 3 孔を有するが、8 は穿孔部分の破片であるため全体は知り得ない。胎土・焼成ともに良好である。ゆるやかな傾斜で広がる鈎状の裾部と、ふっくらと外張りする柱状部は良く調和している。この脚に大きく開いた朝顔形の杯部が乗り、さらに力強さと安定感を覚える。

杯部は、口唇が若干反転した側壁と左右に開いた底部とに分れ、2 つは凸帯に似たくびれを示しながら接続される。この杯部と脚部は、それぞれ別に作られて接合されたものであろうが、その状態を観察できるものはなかった。脚も、柱状部と裾部とが別々に作られて接合されたと考えられるが、明確な観察は困難である。杯部側壁外面には荒い刷毛目が、また内側底面には赤色顔料が残存している。脚柱状部内側にはヘラ整形のあとが残っている。この A 類高杯は、口縁部径及び脚底径が他の高杯に比べるとともに 3～4 cm 大きい。

B に当るのは1・2・4・6の4個である。成作及び胎土・焼成ともにAに同じであるが、Aに比べ脚の裾部が短（底径が小さい）かく、傾斜が大きい。また杯部口縁径が小さいために全体にやや細く見える。脚柱状部内側には寛整形の跡があり、杯部内底には赤色顔料が残存している。1・2の杯部側壁には刷毛目がある。

C に当るのは5・9である。9は脚部の小破であるため全容は知り得ないが、他の高杯と異なり、ふくらみがなく細形のようなものである。

5は、杯部及び脚部はA・Bと類似するが、脚柱状部が特に高い。したがって他の高杯と異なり、極めて細く背が高く見える。焼度が低いためか非常にまろく刷毛目等は観察できなかった。

実測図は、高杯の一部のみ記載したので、部分の計測値を表にしておく。

高 杯 部 分 計 測 表 (単位 cm)

区 分	総 高	杯 部 高	脚 部 高	口縁部径	底 径	透 孔 数
No. 1	15.6	6.6	9.0	17.2	13.5	—
2	15.0	8.0	7.0	19.1	15.3	—
3	15.6	7.7	7.9	22.4	18.7	3
4	14.8	6.7	8.1	18.7	15.1	—
5	16.8	8.5	8.3	23.7	19.3	3
6	14.7	7.6	7.1	20.0	15.3	—
7	15.3	7.9	7.4	19.8	15.0	—
8	?	?	?	?	?	1孔以上
9	?	?	?	?	?	?

鉄 製 品

剣 (第15図・図版15—3)

現在長19.7cmの破片である。発見者は、北側壁に添った状態で発見したと云う。実測図の断面個所において、幅2.7cm、厚0.7cmを数える。前後において幅が異なる。木質が付着残存している。

刀子 (第15図・図版15—3)

刀子は、第15図の2本で(7)は石室の東壁付近より発見されたという。(7)は現存長5.9cm、実測断面個所において幅0.7cm、峯厚さ0.3cmを数える。先端に向かって細くなる。柄部は欠失している。

(9)は、有孔円盤とともに周溝底に密着して出土した。現存長5.9cm、実測断面個所において巾1cm、峯厚さ0.2cm。柄部は幅0.9cm、厚さ0.2cmの長方形である。また柄部には木質が残存し

ている。(7)と同様先端に向って細く尖るのが特徴である。

鐵 (第 15 図・図版 15—2)

鉄鍬は、石室の南壁東端から15本1括して発見されたという。15本全て同趣向の形状を示している。全長14.4cm~16.7cm。先端は、柳葉形に丸味をおびて尖り、横断面は半円形である。なお、先端が若干内傾するものがある。茎は断面方形ですらりと長い。

滑石製有孔円盤 (第 17 図・図版 14)

前記刀子と接して周溝より発見された。厚さ2mm、3cm×2.8cmのやや不整形な円盤で、中央に径2mm×1.5mmと径1mmの大小2個の穿孔がある。穿孔は両面から穿たれている。また大きい孔は、重複して2度穿たれたため瓢形をしている。

6. 第 6 号 墳

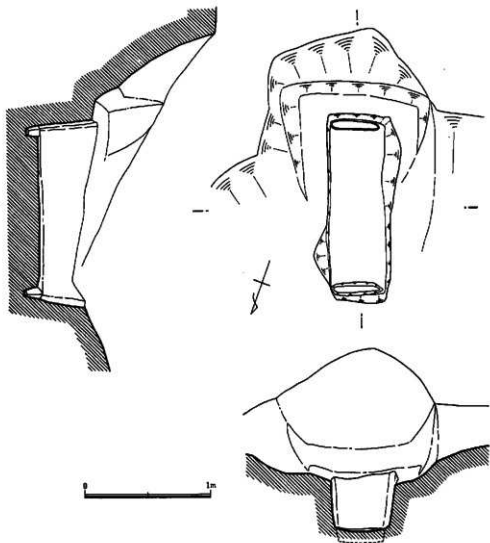
第6号墳は本古墳群中最も南側の丘陵背部からはずれた丘陵南斜面にある。本墳はブルトウザ一通路にまともにぶつかり、我々が発見した時は北側小口の花崗岩が1個残っていたにすぎない。これが箱式石棺であったことは、残った石の両側にわずかに石の取れた跡形が残っていたことで確認している。そこでこれを第6号墳としたが、小口石から指定すると割合小さな石棺であったらしい。石棺の北側は地表が残る地形もわかるが、現状では墳丘は存在せず、また削られた断面を精査した結果も周溝、盛土等は確認できなかった。したがって第6号墳は小形箱式石棺が存在したということのみ記録できたにすぎない。

7. その他の埋葬遺構

炭焼古墳群調査中に古墳に直接関係がないと認められる凹地や遺構があったが、それらの中で確実に遺構として確認したのは土壇墓2基のみであった。これらは炭焼古墳群と別に第4号墳と重複した木棺墓を第1号土壇、第3号墳と重複したものを第2号土壇とする。

第 1 号 土 壇 (木棺墓) (第12図・図版13—1)

第4号墳の周溝を調査中東側コーナー付近で周溝底に灰色の堅く締った砂質の層があらわれたのであるが、この層は薄く、その下層は急に柔らかな黄褐色土となった。ここに周溝掘きく以前の遺構があることを発見したのである。この遺構は主軸をN—20°—Wの方位に長さ1.5m、幅50cm、深さ約45cmの土壇の中に木棺を納めた木棺墓であった。木棺が納められていたと決めたのは土壇の両小口に棺床より約10cm深く幅5cm~7cmの溝が掘込まれていることからで、ここに小口板を立てたと考えるからである。さらに土壇の南側小口角には木棺の側板のための掘込みと思われる浅い溝が確認できた。また土壇に詰っていた土が特に柔らかくさらついたものであったことも木棺説を裏付けている。そこでこの木棺の形式を復元してみると次のようになる。使用された木板の厚さは小口溝から推定して5cm以下のもので、小口板と側板の組合せは小口板が両



第 12 図 第 1 号 土 墳 (木棺墓) (縮尺 1/30)

側板の内側に入る形式のいわゆる長持形石棺に見られるような組合式木棺である。底板の存在は不明だが、存在したとしても小口板より出ることにはない。この組合式木棺の内法は長て約1.2m、幅約35cm、深さ約40cmと推定される。蓋が存在したことは土の詰り具合でも推定できるが、さらに南側は地表から掘込まれた墓壇の状態がよく残り、蓋掛のための段と思われるものが存在する。しかし木蓋が縦に長く渡されたか、横に何枚かの木板が渡されたかは知るよしもない。

組合式木棺の埋葬にあたっては、まず適当な広さの墓壇を掘り（長さは不明だが幅は約1.3m）、その中に木棺を納めるための土壇を掘っている。この時棺床の深さは地表から約1.5mと

なっている。土壌内に木板を立てる溝を掘っていることは木板を固定させなければならないからであり、換言すれば木棺は組立てられて運ばれて来たものではなく、土壌内で組立てられ、しかる後に死体が納棺されたことを物語っている。

木棺墓の時期については第4号墳より古いことは確認したが、第4号墳以前のどのあたりにあたるかは不明である。ただこの古墳群のある丘陵には弥生前期の遺構があったらしく土器片が少量発見されている。

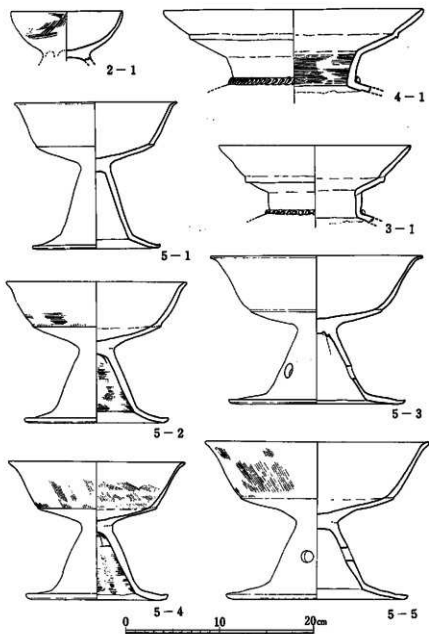
最近各地で木棺墓の発見が報告されているが、地盤に溝を掘り木板を立てた例は少ない。その例には八女市亀ノ甲①と筑紫郡伯耆社遺跡②の2例がある。このうち伯耆社の例は墓壙を掘り、深く埋納されているところから、大きさ、木棺の形式まで大変よく類似している。しかもこれは遺構の重複により弥生中期中葉以前の組合式木棺墓であることが確認されているので、炭焼の本組合式木棺墓も弥生中期中葉以前にのぼる可能性が強い。

第2号土 墳（図版13—2）

第3号墳の東側周溝南端に確認されたものであるが、当初これを土壌墓とするかは疑問であった。土壌は周溝東壁に掘込まれたかのような形状を示し、形態的に特異である。調査の際に周溝との新旧関係等は判明しなかったので、確証はないが、これが土壌墓であれば、明らかに周溝を意識して掘られており、独立した土壌墓でないことをその形状が示している。ただ、周溝コーナー近くにあり、その軸が多少ずれているし、この付近はブルドーザーにより削平されているので一応別に扱った。長さ1.9m、幅30cm～35cmの内法をもっている。

註1 波多野稔三外「亀ノ甲遺跡」（八女市教育委員会、昭39）

2 亀井勇・松岡史「福岡県伯耆社遺跡調査概報」（福岡県報36、昭43）



第13図 炭焼古墳群土器実測図 (縮尺 1/4)

5-1の5は出土古墳の号数を示し、1は土器番号で高杯部分計測表と図版14の番号と同じ

第 3 後 論

1. 遺物について

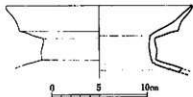
炭焼古墳群出土の遺物は、それぞれ各遺構で簡単に紹介したが、ここでは数少ないこれらの遺物について私見を少し述べてみたい。調査で出土した遺物中、炭焼古墳群構築以前の少量の弥生式土器片は省略し、古墳群に直接関係ある遺物のみを記する。

土 器 (第 13 図)

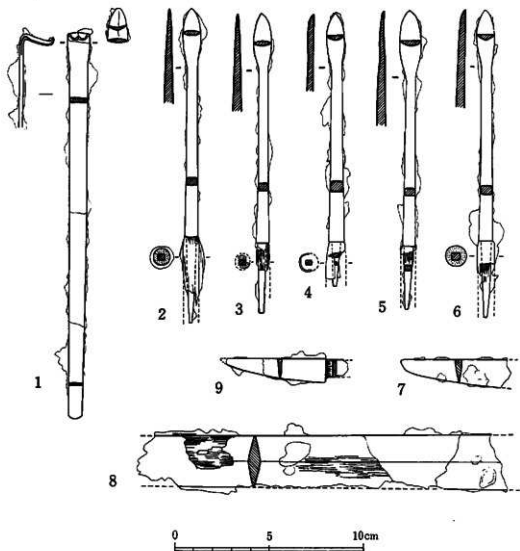
発見された土器は少なく、細片となっているものが多いため、中にはその形態さえ明確に復元し得ぬものもある。これらの土器の出土状態は各遺構で述べたとおりであるが、第5号墳周溝内土師高杯群は別として、その他の土器は数も少なく、その埋没状態は溝底面でもなく、散乱していたことは、古墳構築当時のものではなく二次的な埋没とも考えられる。しかし、現在発見されている方形周溝墓のほとんどが、その状態にあるし、溝内から発見される土器は、古墳と密接な関係をもって墳丘上にあつたものとも考えられる。とにかく、これらの土器が時期的にも、さらに墳墓において土器のはたす役割に多くの問題を含んでいるし、この地方に類例の少ない土器であることから古墳の物語る意義は大きいように思われる。したがって炭焼古墳群に直接関係あるものとして話しを進める。

第2号墳出土の高杯は脚部にあたる破片が発見されなかったが、この土器はむしろ下に脚がつくというより、台状のものがつくのではなからうか。どちらにしろこの形式の土器は北部九州では筆者の知見に触れないが、熊本県球磨地方①には弥生後期に深い壺に台のつく器形が知られている。このことから弥生後期とするのは無理だが、現在のところ古式土師器にこの形式が見あたらないのでいかんともしがたい。

第3、4号墳の壺形土器は、前期前方後円墳の代表的な桜井茶臼山古墳出土の二重口縁の壺形土器に類似している。ただ違っている点は肩部にへう状のもので大きく刺突した凸帯を付した点であろう。茶臼山様式の口縁をもった壺は、西日本では唐古第V様式を上限とし、岡山県玉治遺跡②、金蔵山古墳③、佐賀県鏡子塚古墳④、熊本県高塚遺跡⑤、福岡県東小田塚本遺跡(第14図)などからも出土している。これらの例の土器には、炭焼第3号墳、第4号墳出土のような装飾的凸帯はないので比較が困難である。このような凸帯は弥生後期に見られるところからそのなごりであろうが、鏡子塚、高塚などの例にはないところから、あるいはそれらより古い様式であるかもしれない。このよう



第14図 福岡県東小田塚本遺跡
土師器 (縮尺 1/4)



第15図 炭焼古墳群鉄器実測図（縮尺 1/2）

に茶臼山様式の土器より多少先行する形態をもっているが、第4号墳出土のものあたりは二重口縁もかなり退化しつつある。これを考え合せると第3、4号墳の土器は4世紀中葉に位置づけるのが適当かと思われる。

第5号墳の高杯は、関東でいう和泉式に類似している。この形式の高杯は竹ヶ本遺跡⑥から出土しているが、脚に孔がある点など炭焼第5号墳のものは形態的に多少先行すると思われる。古墳からは横穴式石室で最も古い部類に属している佐賀県横田下古墳石室内出土があり⑦、5世紀前半代に考えられているが、これよりは先行する。さらに王泊遺跡と佐賀県帯原山神龍石の郭内

で発見された土師高杯は炭焼第5号墳の高杯と同一形式のもので、これは「和泉式の直前段階あたりに比定でき、4世紀代にまでのぼるとしている」⑩。以上の点を考慮して5号墳の高杯群は4世紀末から5世紀初頭に位置づけることが可能である。

鉄 器 (第15図)

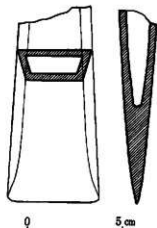
第3号墳出土の鉋は、長さにおいて弥生時代のものに比較すると著しく長い。この鉋は極度に曲っているが、鉋にはある程度弯曲したものがあるとして、この鉋の刃のくぼんだ方が下面とすれば逆に屈曲していることになり、二次的に曲ったことが明らかである。この鉋は形式的に古いものではないが、類例を求めてみると次の例がある。この鉋は刃部に特徴があり、同様なものが山梨県大丸山古墳⑪、大阪府アリ山古墳⑫、鳥取県国分寺古墳⑬などにある。西日本の出土例を知らないが、あまり古くはもってはいないようである。

第3号墳出土の鉄斧は詳細を記すことができないが、これは明らかに鍛造によるもので、金蔵山古墳、熊本県長目塚⑭、福岡県山ノ神古墳⑮などに類例が見られる。朝鮮に類例があるところから、伝来品の可能性が高いが、これは別として、この種の鍛造鉄斧は沖の島遺跡⑯からも多く出土していることから、5世紀代には一部に使用されたものらしい。

第5号墳の鉄鍬15本は同一形式のものであるが、鋒の部分を見ると片面が扁平なものが多い。この形式は細根式、長頸式などによれば、5世紀代に出現するようになっている。

鉄剣については破片となっているため、いかんともしがたいが、石室内と周溝内土壌発見の刀子は、身幅が胴から切先まで直線的に細くなっているが、これは使用度によるものであろうか。

有孔円盤が第5号墳周溝内から発見されたことは炭焼古墳群の1つの特徴となったが、これが何を意味するかはむずかしい。



第15図 第3号墳鉄斧復元図
(縮尺 1/2)

- 註 1 小林行雄・杉原庄介「弥生式土器集成本編」(日本考古学協会、昭39)
- 2 坪井清足「岡山県笠岡市高島遺跡調査報告」(岡山県高島遺跡調査委員会、昭31)
- 3 西谷貞治・鎌木義昌「金蔵山古墳」(昭34)
- 4 松尾祐作「佐賀県佐賀市鏡子塚」(日本考古学年報4、昭30)
- 5 熊本市立博物館で実物をみる。
- 6 渡辺正気「筑紫郡春日町竹ヶ水遺跡調査報告」(福岡県報22、昭37)
- 7 松尾祐作「横山下古墳」(佐賀県報10、昭26) および松岡史の示教による。
- 8 小田富士雄「帯限山神籠石とその周辺一重・三、郭内の遺構と遺物」(佐賀県報16、昭42)
- 9 西谷貞治「考古学辞典一巻」(水野・小林編、創元社刊、昭34)
- 10 藤沢幹・井上薫・北野訓平「河内における古墳の調査」(昭39)
- 11 今井亮「木工技術」(日本の考古学V、昭41)

12 坂本経典「阿蘇長目録」(熊本県報3、昭37)

13 九州大学考古学資料室蔵による

14 原田大六「沖ノ島—第三章、第三節工具」(宗像神社復興期成会、昭33)

2. 炭焼古墳群の性格と年代観

昭和39年8月に東京都八王子市向原遺跡で発掘調査された方形周溝墓は、弥生末の特異な遺構として大場磐雄教授は「方形周溝特殊遺構」と命名された①が、下津谷達男氏がいうように、名称では「墓」としての断定をさけながら、発掘者は殆んど墳墓と推定し、処理して来た②。これ以来この種遺構が目されるようになり、急激にその例が増加してきた。九州では、熊本県高塚遺跡③が再認識され、福岡県平原遺跡④も発見されて、九州にもその類例が知られるようになった。

炭焼古墳群の立地は、平野を望む丘陵上が選ばれ、その稜線に連続的に築造されているところは、福井県王山、長泉寺山⑤、の方形周溝墓群と同じで、関東その他で発見されている方形周溝墓の立地と多少異っている。しかし、それが扁平な台地が選ばれているところは本質的には変わらないのかもしれない。炭焼古墳群の場合立地としてあまり適当と思われないような傾斜のある狭い丘陵背部が選定されたことには、それなりの理由があるはずである。それには政治的、あるいは共同体的な関係、住居との関連、古墳自体の築造上の問題、さらに方形周溝墓のもつ特殊性なるがゆえの立地選択など色々考えられる。今回発掘調査した古墳群立地は丘陵支脈に属し、主脈にも低墳丘の古墳が並び、ボーリング調査によると主体部に石棺らしきものがあるものもあるが、周溝が確認されるものが少ない。さらに、この丘陵の南部の稜線上に長さ80m程の古式の前方後円墳の大塚古墳がいとなまれているので、これらとの間に政治的、共同体的な関係が生じるのは当然であろう。一見には丘陵の傾斜のある支脈と平坦な主脈が区別されているだけであるが、これが平地でないというところに古墳の立地として丘陵が選ばれるようになったことを逆に裏付けている。もちろん住居に近いであろうし、築造上からも傾斜があり背部の狭い丘陵上では丘尾切断状に一方に溝を掘れば、容易に独立した墳丘が形成される。この場合、いわゆる「方形周溝墓」で少し強くいえば、観念的にいわれている方形にめぐる「溝」は方形区域に対して「従」の立場となる。つまり、方形周溝墓において、方形に囲まれる「溝」が目的ではなくて、溝によって方形に区画される「区域」が目的なのである。方形の周溝内から土器が発見され、中には底部穿孔土器が含まれているところから、前期古墳の主体部をめぐる方形の埴輪列に関連づけるが、この場合も「溝」を意識しすぎるくらいがあるように思われる。王山2号、6号、25号、長泉寺山高山2号、3号、4号、6号墳のように同様な立地にあるのはもちろん、埼玉県榎山遺跡⑥のように台地上でも、少し斜面にかかる傾斜面の方には溝があらわれない。さらに岡山県都月2号⑦、岡三因遺跡、同向木見遺跡⑧、福井県原目山⑨などのように「溝」をもたず、方形台状

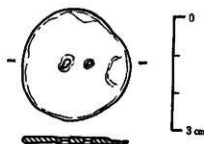
の「区域」を形成しているのは、小出義治氏のいうように「発展した形態」⑨であるとかかりいえないようだ。たしかに炭焼古墳群においては、それ以上に墳丘形成のためにのみ丘陵切断状に溝を狙ったきらいがある。この点が炭焼古墳群の性格の1つでもあり、年代鑑として重要な要素となってくる。

方形区画を目的として掘られた溝も、それ自身重要性をもっている。周溝内から遺物が発見されることは、方形周溝墓が目ざれるようになった当初から、その形態

と共に問題視されて来た。しかし、それらの多くは土器であった。この炭焼古墳群では、鉄器、赤色顔料も伴出している。さらに5号墳では有孔円盤が土壌状の凹味から発見されたことは、方形周溝墓における周溝の特殊性といえよう。この傾向は前期古墳にも見られ、成熟期古墳のそれとは明らかに区別できる。前にも述べたように現在報告されている方形周溝墓を見ると、周溝内の土器は、そのほとんどが溝底になく、また大部分が破砕している。このことは溝内にこれらの土器を入れることを目的としたものではなく、二次的に溝内にはいったことを表わしている。すなわち、埋葬時あるいは、その後、方形区画内で使用された土器は、使用後区画内に放置、または配置された土器が溝内に流入したものと考える。桜井茶臼山古墳に見られるような壺形土器の方形配列とは密接な関係にあると思うが、周溝内に配置したものではない。第3号墳出土の鉄斧はこの可能性が強いが、溝底の赤色顔料、第5号墳周溝内の刀子、有孔円盤は別に考えなければならない。赤色顔料などは偶然溝内に入ったものではなく、溝内に土壌状のものがあることは意識的であるように思える。福岡県平原遺跡でも周溝内から、玉類、鉄鏃、鉈、鉄斧が発見されているし、土壌もある。千葉県堤台遺跡、神奈川県東海大学内遺跡の周溝内にも土壌状のものが発見されているので、人体を埋葬したかどうかは別として、土器以外のものでは意識的に周溝に入れられたものがあるようだ。

さらに炭焼古墳群の性格としてあげられるのは、主体部に、弥生時代の墓制が持込まれているということである。つまり、これは地方色でもあり、古き伝統である。木古墳群の箱式石棺、土壙、木棺、石蓋土壙を弥生時代のものと比較すれば、箱式石棺、土壙は頭部の方が幅が広がっていることで区別されるが、石蓋土壙は土壙の形状など弥生時代のものから変化が見られない。炭焼古墳群中で主体部に色々な形式が採用されたことは非常に興味深いことである。明らかに他から独立した区画内に埋葬されるようになって、それが選ばれた人々であっても、群集性をもつことは「共同体」の伝統であり、新しい文化にそまきれない古さである。

最後に問題となるのはこの古墳群の築造年代であろう。土器について述べたように、2号、3号、4号墳出土の土器をもって築造年代を決定するのは、比較資料の少ない点から、はなはだ危



第17図 有孔円盤 (実 大)

険であるが、5号墳出土の土師器高杯は有力な資料となる。これを和泉式の前段階、さらに布留式の新しい様式に比定できるから、5世紀初には第5号墳が築造されたことになる。炭焼古墳群において第5号墳は地形的に最も低位置にあり、竪穴式石室をもつ円墳であることから、2号、3号、4号より新しくもっているのではないだろうか。そこで炭焼古墳群の方形周溝墓は、少なくとも4世紀後半代には築造されたことになる。これは九州において畿内型古墳が発生した頃にあたっている。すなわち、大和政権と結合することのできなかった「共同体」の所産であり、「周辺地域にありがちな、保守的傾向の中に新しい文化の波及が共存という形で受け入れられた」⑩ものである。この新しい文化の波及が方形周溝墓の立地に変化をきたし、共存したのであろう。ここで鉄器類が、従来の考えでは新しくなるが、土器と同年代にあげても不都合なことはないのではなかろうか。

古墳群の性格にもなるが、第2号墳の場合死体埋葬は家族墓であるから、横穴式石室のような追葬を考え、古式古墳の一墳一葬の原則を順に新しくするのは当然のように思える。

- 註 1 大場盤雄「東京都八王子発見の方形周溝特殊遺構」(日本考古学協会昭和39年度大会研究発表要旨)
 2 下津谷達男「方形周溝墓とその掘起する諸問題」(歴史教育15—3、昭和42)
 3 花岡興輝「八代郡北村高塚金道遺跡」(熊本史学11)
 4 原田大六「福岡県糸島郡平原弥生古墳調査報告」(福岡県報33、昭和40)
 5 齊藤要一「福岡県江守市王山・長泉寺山古墳群」(江守市教育委員会、昭和42)
 6 下津谷達男「野田市掘台遺跡」(上代文化35、昭和40)
 7 和島誠一編「日本の考古学Ⅲ」の巻頭写真参照
 8 鏡木義昌「祭祀と信仰」(日本の考古学Ⅲ、昭和41)
 9 甘粕健他「福岡市原目山古墳群の調査」(日本考古学協会第33回総会研究発表要旨、昭和42)
 10 小山義治「祭祀」(日本の考古学Ⅴ、昭和41)
 11 小山義治「祭祀」(前掲)

第 4 炭焼第2号墳人骨について

この古墳の1号・2号の両石棺のうち、2号棺内の人骨は既に調査前に高田一美氏によって採上げられていたので出土状況など不明な点が多い。同氏の談によると2号石棺開棺時、南東隅と北西隅とに集骨の状態で存在したのだそうで、別々に採取保管されていた。従ってこれらをそれぞれ2a及び2b人骨として整理した。

1 号 人 骨 男性、熟年(40台)(図版12—2)

出土状態 1号石棺内の南東壁寄り、一体分の人骨としては腐食して少量の保存の悪い人骨が、小円礫を敷いた底面上に半ば土に埋もれていた。全部の骨の配置は直径約40cmの円周内に

まとまっていた。このようなことは、極端に全身を屈して坐葬にすればあるいは起り得るかとも考えられるが、棺内の高さ30～32cmでは到底無理であり、また左側の胫骨が中央で真二つに折れ2本並んでいるようなことは、原埋葬時の姿勢での腐朽では先ず起り得まいと考えられるので、軟部腐朽後の人為的な集骨と見たほうがよさそうである。

保存状態 木の根などの侵食によって全体に不良である。

残存骨は、頭骨では、左眼窩入口をめぐる径11cmほどの顔面骨の大片と、10数個の細小片があり、歯は下顎左側の側切歯と第3大臼歯の2本のみである。四肢骨は、すべて骨端部の腐食した主要長骨7本分の比較的大きな破片と、他は新十片の細片から成る。

以上、1個体分のもので、他個体の混入と思われる骨片は見当らない。石棺内壁には赤色顔料の附着が認められたが、骨そのものには全体に亘って認めることが出来なかった。

性別推定 眉弓の突出度、眼窩上縁の厚み、前頭側面観、頭骨壁の厚さ、四肢骨の太さ、それらのいずれから見ても男性的な特徴を示す。

年齢推定 下顎第3大臼歯は既に象牙質を露呈し、冠状縫合左外側 $\frac{2}{3}$ が完全に癒合しているの
で40台と推定した。

特記所見 顔貌は、弥生時代人に似て、鼻根部の陥凹があまり無く、眼窩高もやや高い（眼窩示数80.4）。しかし、立岩や三津弥生人骨ほどのたくましさは無い。四肢骨はやや太く（左大腿骨骨体中央周径86mm）、胫骨もいくらか扁平に傾く程度である（扁平示数74.1）。

2a 号 人 骨 女 性、成 年（30台）

保存状態 全般に1号人骨よりも更に不良である。残存骨片の大半は頭骨片が占め、長骨片は長さ4cm以下の細小片数箇所があるだけである。頭骨は、後頭骨から右側頭骨にかけての大片と、顔面その他の小片から成る。残存歯には、上顎両側の第1及び第2大臼歯と下顎左側第1大臼歯とがある。他個体所属と思われる骨片は見当らない。

性別推定 乳様突起がやや大きい以外は、骨壁の厚さは薄く、後頭骨・側頭骨もやや小さく、外後頭隆起の発達も弱い。これらは、いずれも確実な性別判定基準にはならないが、男性と見るより女性と見るほうが妥当と考える。

年齢推定 歯の咬耗は象牙質が熟年を思わせるほど広く露呈しているが、人字縫合がラムダー点に近い部を除き未だ癒合していないので、30台の年齢と一応推定した。

2b 号 人 骨 性 別 不 明、小 児（10才程度）

保存状態 全般に著しく不良で、少量の頭骨片、乳歯を混ざる歯、及び四肢主要長骨片を残すのみである。頭骨は菲薄で、内板と外板が離開した部分が多く、やや大きな破片は後頭骨で、他はいずれも細片である。長骨破片も長さ5cm以下の薄い小片が大部分で、わずかに1本だけ左

側大腸骨の骨体中央片で長さ 15cm のものがある。骨表面は著しい侵食を受け凹凸がひどく、全般の色調は薄い黄褐色を呈するが、僅かながら暗赤色顔料の附着を認めることが出来、これは四肢骨よりも頭骨片にやや多い。他個体のものと思われる骨片は見当らない。

性別推定 未成年骨であるので、たとえ骨が良く残っていたとしても困難である。

年齢推定 幸い歯牙交替期にあるので、比較的現実的な判定を下し得る。

残存歯の歯式は下記の通りである。

(5) (7)6V(4)(3)	IV V6(7)
(8)(7)6V 4 (3) (5)	4 V6(7)(8) (5)

すなわち、一般に 6 才臼歯と云われる第 1 大臼歯は既に萌出して咬耗があるが、12 才臼歯と云われる第 2 大臼歯はまだ萌出していない。さらに咬耗の著しい乳臼歯 IV 及び V が脱落寸前の形で残っている。従って 10 才前後の小児であることは確実である。また残存大腸骨の骨体中央周径 60 mm (現代九州人成人の平均、男性 82.4 mm、女性 74.2 mm) で細く、断面形は比較的丸くて、形状から見ても小児のものである。

全 般 の 考 察

以上、各石棺出土人骨の性状について記したが、ここで断って置きたいのは性・年齢推定の信頼度についてである。保存状態の頗る悪いこの古墳人骨の場合、その信頼度の高いものから順に並べると、先ず小児の年齢、ついで成人の性別で、最後に成人の年齢推定になると思う。一般に年齢の推定は加齢とともに諸特徴の個体差の幅が大きくなって困難となる。

上記を考慮の上、これらの人骨と石棺との関連について少し考えてみたい。については、重要事項を下記に要約して表示する。

石棺番号	人骨番号	推定性別	推定年齢	石棺の規模 (内径 単位cm)		
				長	幅	高
1	1	男	40 台	169	50 及び 36	30~32
2	2 a	女	30 台	150	35 及び 22	30
	2 b	不明	10 才前後			

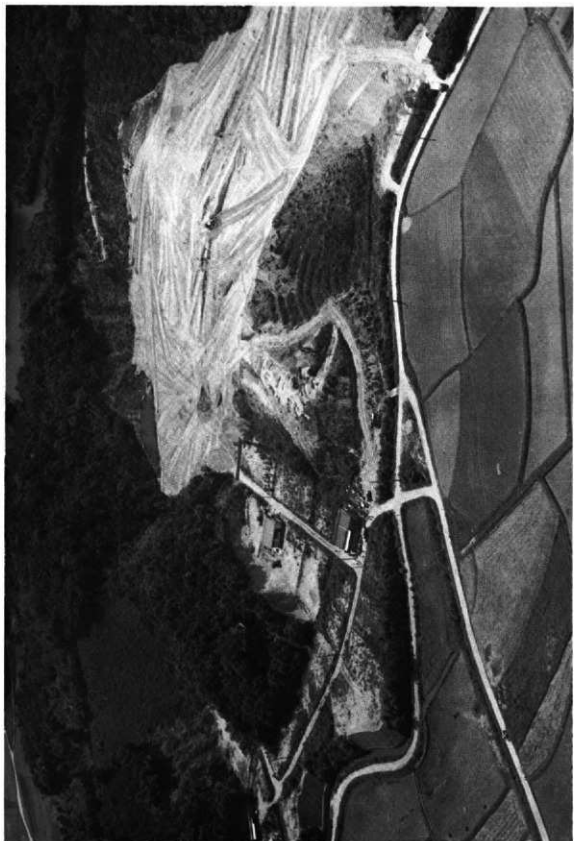
さて、調査員柳田康雄の意見によれば、これら 2 石棺の方形周溝域内に於ける配置は、始めから予定されていたものの如くであるという。ところで 1 号石棺の長径は男性成人の伸腰葬に手頃の規模を持ち、2 号石棺は前者より長幅ともに小さくやや小柄の女性か、あるいは軽く膝を屈した姿勢を考えればこれもよく適合する。小児の年齢 10 才として、その身長は 130 cm 程度と推定されるので、2 号棺は小児用としては少し大きすぎる嫌いがある。また、この石棺内の 2 個体の人骨片には相互の混在が認められないので、少くとも同時埋葬ではなく、後になって女性被葬者の

遺骸を東南隅に取片附けた上で小児を他隅に葬ったものであろう。

1号男性人骨の集骨も、あるいは同棺内他側に乳幼児などが重葬されたためで、そのような幼若骨は有機成分に富む為に完全に消滅したのだとも解釈出来る。

埋葬の姿勢や順序は問わずとも、方形周溝域内に、上記の如き性・年齢を推定される被葬者があるということは、家族墓との想定を非常に強めるものである。

方形周溝墓は近年とくに注目されだして、弥生時代から古墳時代の過渡期の様相を示すとの見方がある。この炭焼2号墳の場合、今まで一般に知られた弥生時代の共同体墓とは少くとも異なり、丘陵上に明確に区画され、さらに家族墓である可能性が強い。築造の時期を奈辺に置くかで、その有する意義には開きが生じよう。





1 古墳群遠望 西から



2 第2号墳全景 南東から



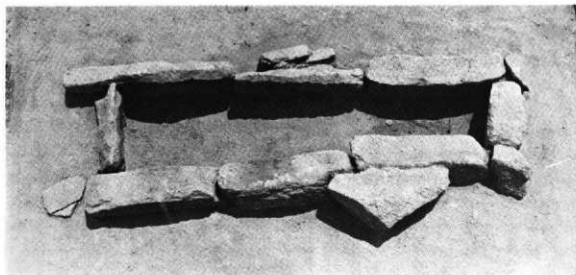
1 第2号墳主体部 南東から



2 第2号墳第1号棺石蓋



1 第2号墳第1号棺(箱式石棺)



2 第2号墳第2号棺(箱式石棺)



3 第2号墳第3号棺(土槨墓)



1 第3号墳全景 南東から



2 第3号墳東側周溝 南から

1
第3号填主体部



2
第3号填主体部头部

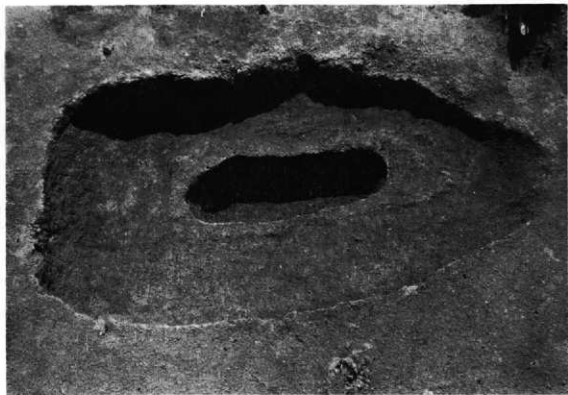




1 第4号墳全景 南東から



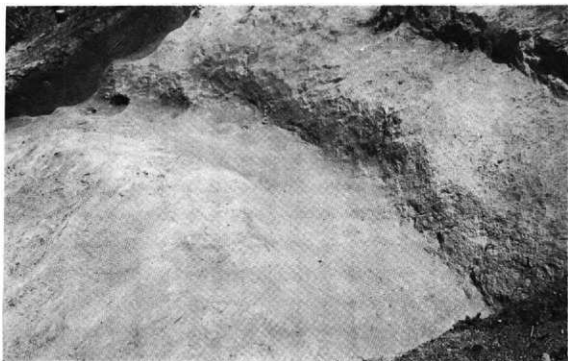
2 第4号墳主体部石蓋 北東から



1 第4号墳主体部 北東から



2 第5号墳全景 南西から



1 第5号墳東側周溝 南西から



2 第5号墳周溝内土埴遺物出土状態 北から



1 第5号墳周溝内土器出土状態 南から



2 第5号墳石室蓋石



1 第5号墳石室 北東から



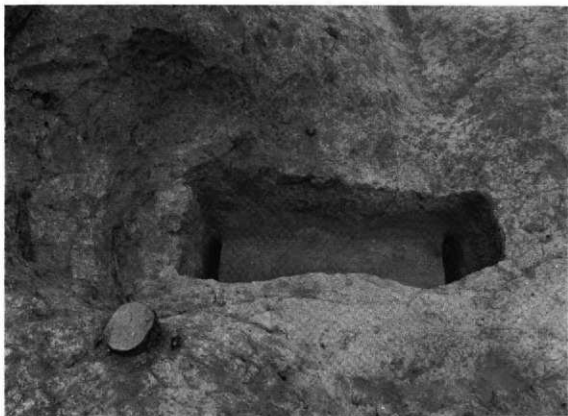
2 第5号墳石室北壁 南西から



1 第5号墳石室東壁および南壁 北西から



2 第2号墳第1号棺内人骨



1 第 1 号 土 竈 (木棺墓) 北東から



2 第 2 号 土 竈 北西から



有孔 凹 盤



5-1



5-3



5-2



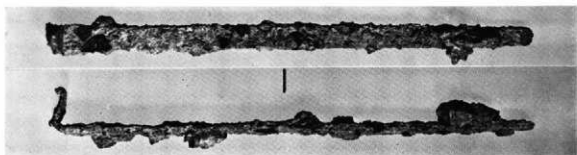
5-4



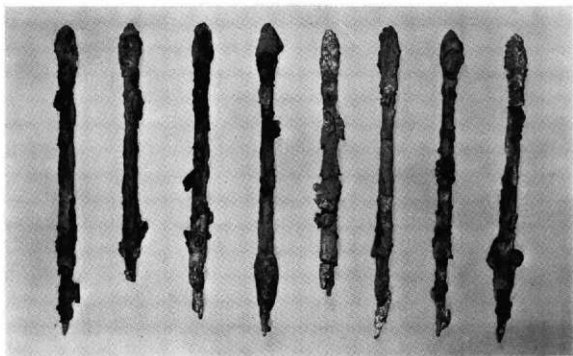
5-7



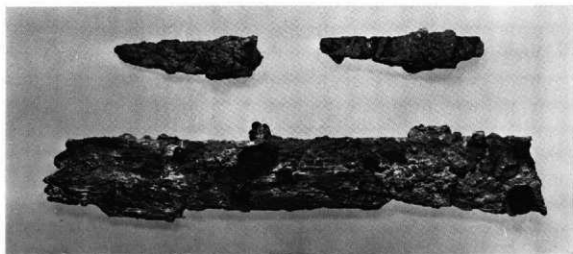
5-5



1 第3号墳出土鉾



2 第5号墳出土鉄簾



3 第5号墳出土鉄器 上は刀子(右は周溝内) 下は鉄剣片

福岡県文化財調査報告書 第37集

昭和43年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市西中洲6街区29号

印刷 株式会社 川島弘文社

福岡市舞鶴1丁目5番9号